



# 陽気だより

No.76

2013.7.15

●ホームページからも「陽気だより」  
最新号・バックナンバーをご覧いただけます

<http://yotokusha.com/>

図書出版 養徳社 〒632-0016 天理市川原城町 388 TEL 0743 (62) 4503 / FAX 0743 (63) 8077

養徳社

検索

第9号 (昭和25年2月号) から

「陽気」は、昭和24年4月の創刊、今年で64年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

## 團參今昔ばなし

柴田 正一

統を持つ團參には、その折々の時代の姿が折り込まれて、いろ／＼の尽きない思い出を残して

同じ信仰に結ばれた者同士

います。

が、同じ列車で旅をして、おぢばに帰らせて頂く。これは、團參でなくては味わえない喜びです。しかも團參列車が丹波市駅に着くと、待ちかねていた出迎えの人と旗の大波に囲まれ、よくお帰りでした、御苦労さまと熱狂的な歓迎を受けます。あの駅頭での感激というものは、一度でも團參に参加した人々にとって、再び忘れることの出来ない強い思い出となります。

また、この感激の蔭には、

詳細な輸送計画をたて、終始團參客とともに、辛苦を共にした輸送係の人々の人知れぬ苦心と完全輸送の重任を果たしたあとの大きな喜びが秘められています。

春秋二回の大祭、四月の御誕生旬間と毎年々々巡り来る、この年に三度の大祭と必ずこれに伴う團參、長い歴史と伝

試験の稽古などしていたことが強く印象に残っています。三十年祭までというのは團參の、いわば「芽生え」時代ともいいます。か、こういう風に同じ教会の者が何人か集まって、同じ列車で参拝するという時代でした。

「な團參」までが続出しました。運賃もとても安く、帰りにはお伊勢参りや温泉巡りをする教会などもありました。二等車や食堂車を連結したこともあります。

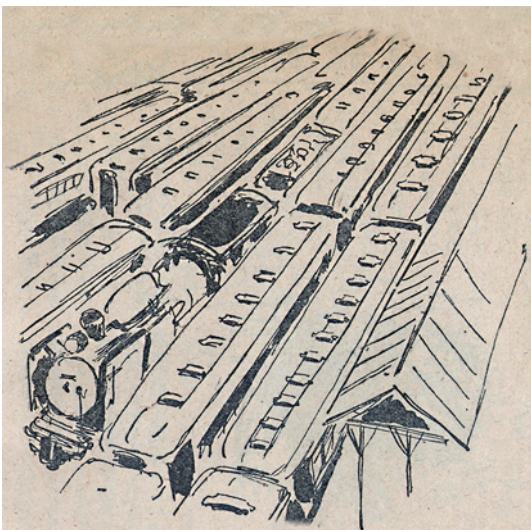
三十年祭が過ぎ、四十年祭になると、この「芽生え」が実を結び、教会毎に、縦の系統別に参拝者を組織して、団体として汽車を仕立てるようになりました。例えば東京なら、東大教会で一本、東本で一本、麹町一本というように、特別列車をつくりました。この時代は鉄道の方でも大サーブスをやった時代でした。車中に板を持ち込み、その上にゴザを敷き、坐って楽に旅をするという豪勢なものでした。終戦直後の混乱期の汽車旅行からみると、まるで夢のような時代でした。お酒や御馳走を車中で食べ、その上三味線入りで踊りや余興をやって、楽しく旅をしたという「陽気

丹波市駅に大きな仮駅をつくり、C51号というような大型機関車が側線に並び、日に数十本の列車が往復するという盛況がこの時代には見られました。だから当時、鉄道省としても大変な苦心をして、詳細な輸送計画を作り、團參の半年前から、本省および各鉄道局の関係者と教会本部の代表者が何度も会議を開いて打ち合わせをしました。

明治四十五年に私が初めて参拝した当時は、ごくのんびりした時代で、朝の十時に東京を発った汽車が、翌日の晩の五時に大阪駅に着いたものでした。そして大阪から翌日電車でおぢばに参りました。ただあの当時の気風で、長い道中の間、他の話は何一つせずに信仰の話や、(別席の)初

つといつてもこのように移り変わりを経ております。

三十本とか、五十本とかいう目標の下に、一日に何本入



れ、何本送り出すかというところが相談され、團参の期日が迫ると共に、更に詳細に発着のダイヤが組まれる。このダイヤ編成には、関係者は夜も寝ずに協議することがありました。

そしてダイヤが決まると、今度は各教会の帰参信徒さんを列車に割り当てるのですが、これがまた大変です。団体だから責任人員をそろえなければならぬ。また、申込者が多くなると、もっとダイヤを増やしてくれという抗議が出る。それを一輛増結するから我慢してくださいと、なだめ



たりして納得してもらおう。毎日教会の事務所は申込みの受付、人員の変更、鉄道の交渉で目が廻るほど騒がしい有様です。

しかし、よくしたもので、勤めきつておれば必ず有難い御守護があつて、参加できないと言つていた人が行けるようになったり、大変な病人が東京駅の改札口を人に背負われて入つたので、駅員から、こんな病人を運ばれたら責任が持てないと注意されたのが、帰りにほびん／＼して帰れたというおたすけまで現れました。これは何しろ貸切列車ですから、中では寝かすことも出来るし、皆がおさづけを取り次がして頂くのですから、こんな有難いことが生まれたのです。團参なればこそその感激秘話です。

規定の時間になると列車乗込みが始まりますが、当時は申込みと同時に仮乗車券を渡し、乗込みの時に個人乗車券と引換えたのですが、何千という人が一時に押しかけるのですから、何輛目乗車と

決めておいても、随分混乱しました。乗車券が足りなくなつたり、余つたりしたことがよくありました。

時には発車間際になつて、飛び入りが出来たりすると、弁当の手はずが狂つてきて、大急ぎで弁当を頼んである駅に数の変更を申し込むなどの騒ぎが起りました。係員は発車のベルまで構内に残つて一切の事務の清算をやつて、飛び乗るように乗込むのが常です。五十年祭になつて、これまでの教会系統別が教区別に変更され、東京で言えば、東京教務支庁で一括し、それを各教会毎に、東本何本、東何本と分けて、列車を編成しました。

そんな全盛期から見ると、戦争中は非常に淋しいものがありました。戦後それがだん／＼復活して、昔の姿のようになってくるのを見て、嬉しい気持ちになります。将来の團参について、私個人の意見ですが、もっと教区と鉄道の連絡を密接にして、時間的にもっと早く計画を作り、帰参される人が今のようにな時間的な制約をうけずに、十分ゆつたりとした気分を味

わつて頂きたいと思えます。何時何分に帰らねばならないと決まつていると、どうしてもゆつくりと出来ず、心が急かれます。

それから、汽車ばかりでなく、船の方とも連絡して、天保山で船を降りるとすぐに團参列車が待つており、今のうちに重い荷物を持つて上六まで電車にゆられて来るというようなことをなくしたいと思ひます。

また、将来、海外からの二世のお客さんに備えて洋式のホテルもつくりたいものです。丹波市駅でも、團参の時は広場にベンチでも置いて休憩できるようにして、長時間の待合に利用したいと思ひます。まあ、いろいろ構想を大きく持つて、明るい楽しい團参をつくりたいと思ひます。

定期購読中

お道の家庭雑誌

# 陽気

◎定期購読の誌代(1冊)  
 半年分…1,600円(送料共)  
 1年分…3,200円(送料共)

※ゆうちょ銀行の青い振込用紙をご利用下さい。  
 (口座番号 00990-3-17694 加入者 養徳社)  
 希望の号を指定の上、お客様の住所、氏名、電話番号をはっきりご記入お願いします。

問合せ先: ☎ 0120-920-398 養徳社 業務部窓口

作品募集

第3回公募

## 養徳社エッセイ賞

募集テーマ「私はこのように学んだ」

1等賞金 10万円(1名) 佳作賞金 3万円(2名)

選者 出久根達郎(直木賞作家)

締切 8月31日(当日消印有効)

※詳細は『陽気』6月号をご覧ください。

【陽気担当者変更届け】陽気お取扱者ご担当者様のご変更の際、弊社ホームページよりファイルをダウンロードいただき 必要事項にご記入いただきファックス下されるか、メールでご連絡ください。折り返し弊社業務部からご連絡させていただきます。 FAX…0743-63-8077 (24時間 年中無休)  
 郵送…〒632-0016 奈良県天理市川原城町388 養徳社 業務部 メール…youtokusha-eigyou@poem.ocn.ne.jp